

R4年度 熊本県音楽教育研究大会

1 主題

語り合おう 音楽の魅力を 響かせよう 未来につなぐ音楽を

2 主題設定の理由

音楽とは、我々にとってどのような価値をもつ存在なのだろう。今や世界の情報を容易に入手でき、あらゆる音楽を見聞きすることが可能な時代、世の中は様々な音楽で溢れている。幼少の頃から、あるいは部活動やコンサートなどをきっかけに楽器等に親しみ、音楽をライフワークにしている人にとってのそれは、分身のような大切なものかもしれない。生活を見渡せば、テレビ、ラジオ、映画、店内等、さらには人生の節目の行事、イベントなど空間のイメージをクリエイティブに演出するものとして音楽が欠かせない。

律令時代、大陸音楽を取り入れ雅楽が成立してから西洋音楽の影響を大きく受ける明治、そして現在に至るまで、歴史的背景と結びついて生まれ継承されてきた様々な邦楽。一方で斬新であったろう洋楽を取り入れ、音楽環境は豊かになったといえよう。

しかしながら 2020 年冬から 3 年にわたるコロナ禍により、音楽活動は制限され、皮肉にもそれによって、我々にとり音楽がいかに唯一無二の存在であるかを改めて知ることとなった。「極限状態の中で人間の心を支えるものは、芸術である」ことを多くの人々が痛感したのである。

人々は音楽なしには人生を語れないといっても過言ではない。それはなぜなのか。音楽が、人の感情、生き様、環境などを表現し、相手に伝えるのにダイレクトな手法だからである。多彩な表現が可能だからである。音楽は我々の心を音というツールを使って表出してくれるばかりでなく、音によって他者と共に心を共有できることを実感させてくれる。我々の心を表現する音楽は、人にとって、もはやなくてはならないかけがえのない存在なのである。

では学校教育において、これからの未来を担い創っていく若者に対し、人生に寄り添い人生を支える音楽との向き合い方をいかに教えるべきなのか。音楽科としてどのような力を身に付ければ、より明るく豊かな人生を保障することができるのだろうか。

2018 年 PISA における日本の読解力の結果概要によれば、「テキストから情報を探し出す問題や、テキストの質と信ぴょう性を評価する問題」の正答率が低く、「自分の考えを他者に伝えるように根拠を示して説明すること」に課題があると発表された。ここでの読解力の定義は「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、社会に参加するためにテキストを理解し、利用し、評価し、熟考し、これに取り組むこと。」である。これを受け、文部科学省が打ち出した施策に「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善により、児童生徒に学習する意義を実感させたり、情報を精査して考えを形成させたり、問題を見いだして解決策を考えさせたりすることを重視した学習の充実」。「自分の考えをもち表現することの重視」「考えたことを話し合ったり、文章にまとめたりするなどの言語活動の重視」が掲げられたのである。

この「主体的・対話的で深い学び」を通して身近な音楽の価値を整理して学びとり、獲得した知識を使いながら「自分の考えをもち表現」し「感性を豊かに働かせながら」音楽を追究する。そのことにより「子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築する力」が培われる。それが、学習指導要領音楽科目目標である「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力」の育成となり、音楽科の存在する意義なのである。

前述の複雑な状況変化として我が国が憂慮する人口動態、気候変動、都市化等の諸問題。さらにはコンピュータ知能が全人類を超える技術的特異点とされる 2045 年問題を目前にして、私たちはいかなる教育活動を行うべきなのか。

火や道具から始まった人類文明の夜明けから、今や世界中でコンピュータチップ開発が競われ、2030 年以降は「意識を備えた強い AI」の登場まで予測される時代へと突入した。「AI が人類の英知を超えることのないよう、私たち自らの能力を今まで以上に高めていく」任務が今、我々に課せられているのである。

来るべき未来が AI とバランスのとれた共存社会の中にあっても、人が紡いできた音楽で人の心を動かし、音楽を人の心でつないでいく誇り高き営みを大切に継承できる力を養わねばならないのである。

“音楽を感じとり、音楽によって魂を揺さぶられる感性”は、AI によって決して超えることのできない人間の力である。人間の本質的な思考や心の在り方を導く我々の真価が問われるのである。

悠久の歴史を経て伝承されてきた国内外の多様な文化や伝統による様々なスタイルの音楽、あるいは身近な音や音楽それぞれが保有する本質的な良さ。それらを理解して児童生徒が共に語り合い、思考を深化させながら新たな魅力を発見する。そして習得した知識や技能を生かしての表現活動により心に音楽を響かせ心を動かし、音楽の素晴らしさを実感して共有しながら、各々の心に確かなる音楽の価値観を確立させていく。この活動を創意工夫し積み重ねることで、何気ない存在だった音楽を再認識し、己の人生や地域社会に必要なものとして確実に自身の心に浸透させる。さらには音楽文化の担い手として、自ら積極的に行動を起こし、音楽を継承しながら豊かな未来を築いていくための力を育むことができると考え、この主題を設定した。

3 大会主題の解説

(1)「語り合おう 音楽の魅力」とは

生活や社会の中の音や音楽、音楽文化から感じ取った特徴やよさ、すなわち「音楽の魅力」を、児童生徒同士や教職員、地域の方と伝え合ったり、先哲の言葉や楽譜等を手がかりに考えたりすることを「語り合う」と捉える。児童生徒が、表現や鑑賞の活動の中で、音楽的な見方・考え方を働かせながらその魅力を「語り合う」ことは、音や音楽に対する自己のイメージを膨らませ、音楽表現に対する思いや意図をさらに広げ深めることにつながるだろう。そのような経験を積み重ねることによって、より深く味わって曲を聴いたり、自分の表現活動に生かしたりする力が育まれると考える。

(2)「響かせよう 未来につなぐ音楽」とは

「響かせる」とは、歌唱、器楽、音楽づくり、創作など表現の活動や鑑賞において、音色や響きに着目した学習や活動である。しかしそれだけではなく、児童生徒が表現の活動の中で、思いや意図をもって創意工夫する際、それまでの学習において習得した知識や技能を活用し、試行錯誤しながら表現することも「響かせる」ことであろう。そして、個人の中で試行錯誤し「響かせ」た音や音楽を他者と共有・共感し、協働しながらつくり上げた音楽は、さらにその響きを一層豊かなものにしていくであろう。

このように、児童生徒が、音色や響きの美しさを身体全体で感じ、そのよさを他者と共に「響かせる」経験を積み重ねていくことで、感動する心や音楽に対する感性が生まれ、心の琴線に響き、ひいては豊かな心の涵養へとつながっていくであろう。

「未来につなぐ音楽」とは、過去から脈々と受け継がれてきた我が国の伝統音楽や、諸外国の音楽、偉大な作曲家の音楽など、未来へとつないでいく様々な音楽のことを指す。また、それらの音楽を鑑賞し演奏して得た知識や技能をより発展させ、新たな音や音楽を創造することも「未来につなぐ音楽」であるといえる。そして、児童生徒が音楽文化の次なる担い手として「未来につなぐ音楽」を継承、発展、創造していこうとする態度を育てることが大切であると考えられる。

4 研究の内容

(1)研究の仮説

- 児童生徒が学習において自ら課題を設定し、見通しを立て、自分の学びや変容を自覚できるような振り返りの場面を設定すること。（学習内容のつながり）
- 対話によって自身の学習について省み、考えを広げ、深めるような場面を設定すること。（他者とのつながり）
- 学習したことや身に付けた力を自覚し、次の学習や生活に生かそうとするような評価の方法を工夫すること。（次の学習や生活とのつながり）

児童生徒の発達段階や実態に応じた音楽教育において、このような「つながりのある」授業づくりを行えば、自ら音楽を奏で、音楽の魅力について語り合い、それを未来に継承し、生涯音楽に豊かに関わる児童生徒を育てることができるだろう。

(2)研究の視点

視点1 「めあて」「振り返り」の工夫（自ら課題を設定、見通し、次の学びに生かすつながりのある学習）

児童生徒が主体となり、学習の見通しを持ち、課題意識と意欲を持ってとりくむ「めあて」のもとせ方や自分の変化に気づき、次の学びや生活に生かそうとする「振り返り」を工夫する。

視点2 「対話」の場面設定の工夫（対話による他者とのつながり）

音楽によって喚起されたイメージや感情、音楽表現に対する思いや意図、音楽を聴きとったことや感じ取ったこと、想像したことなどについて自分の考えを持ち、それを伝え合うことで、自分の感じ方や考え方などをさらに深めていく「対話」の場面設定を工夫する。

視点3 「評価」の工夫（適切な評価による次の学習や生活へのつながり）

評価する場面を精選し、身に付けた力が児童生徒に自覚され、次の学習や生活に生かすことができるような評価の方法を工夫する。